

大学教職員の専門性を活かした多文化共生社会のグローバル人材育成： 全学共通初年次必修科目における国際教育交流と国内学生の成長

八 木 下 雄 清* 貝 沼 恵 美**

キーワード：国際共修，留学生，グローバル人材，大学の国際化，多文化共生

1. はじめに

1-1. 研究の目的

今日の日本は、地域社会や教育現場をはじめ、様々な場面でグローバル化が急速に発展し、常に変化が続いている。教育未来創造会議（2023）は、「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ＜J-MIRAI＞」（第二次提言）において、「多様な文化的背景に基づく価値観を持った者が集い、理解し合う場が創出される教育研究環境（中略）を通じて教育の国際化を推進」することを明示した。一方、各大学ではピア・サポート¹⁾や国際共修・多文化共修が正課内・正課外の活動として実施され、国内学生・留学生の国際教育交流を推進している。

本稿は、2024年6月と7月に実施した立正大学地球環境科学部地理学科による「学修の基礎Ⅰ」における実践を事例に、正課内での国際教育交流活動を通じた国内学生の成長について取り上げ、その可能性と課題を考察するものである。本授業は本学における初年次教育として、全ての学科で実施されている。

本稿の構成は次のとおりである。第1に、国際教育交流活動実施のアンケート結果や導入背景、授業の概要について述べ、地理学科における課題や教員・職員の専門性を活かした授業展開について扱う。第2に、授業後のアンケート調査結果に基づいた国内学生と留学生の交流の効果について論じ、本活動をととして、国内学生にどのような変化が生じたのかを述べる。最後に今後の展開と総括を行う。

1-2. 背景

本学の熊谷キャンパスでは、COVID-19の世界的拡大（コロナ禍）で中止を余儀なくされた日本語プログラム

における短期留学生の受け入れ再開に伴い、2022年9月に筆者（八木下）が企画・運営を担当しRismate（りすめいと）を立ち上げた。Rismateは、国際交流センター管轄のもと、国内学生がサポーターとして留学生の生活や日本語の会話力向上を支援するピア・サポートチームである。グループによる週1回、30分以上の定期セッションをととして、国内学生と留学生が言語交換やかきた作りを行い、異文化理解力やコミュニケーション能力を育成する場としている。サポーターは、事前・事後研修に参加し、必要なスキルの習得や振り返りも行っている。また、2022年度第2期の短期留学生の受け入れ再開後、地理学科と国際交流センターが連携し、初年次教育科目「学修の基礎Ⅰ」における国際共修や「地理基礎巡検」への留学生参加をはじめ、国内学生と留学生がともに学ぶ機会を提供してきた。

2. 国際教育交流活動実施の導入の背景

2-1. 国際的視野の必要性

国際連合教育科学文化機関憲章（ユネスコ憲章）は、文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育を「人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもつて果さなければならない神聖な義務」としている。すなわち、国際理解教育とはまさにそれを体現したものといえよう。今日の日本においても、進行するグローバル化の現実に応じた教育の実施と、国際社会で他者と共存していくためのスキルや資質の修得が強く求められている。

立正大学地球環境科学部（以下、本学部）は、地球環境問題を学際的かつ総合的に研究し教育することを目的として1998年に設立された。設立にあたっては地球全体

* 立正大学国際交流センター

** 立正大学地球環境科学部地理学科

のマクロスケールから地域社会に至るミクロスケールまで、地表面で生じる様々なレベルの環境問題の解決に貢献可能な人材育成を基本理念とした。これらはまさに、「人類が当面する共通課題の解決には、世界の人々の全員参加の行動が不可欠であり、教育こそがその根本的手段である」とする日本ユネスコ国内委員会の『国際理解教育の手引き』の内容とも合致する。

本学部では、海外および異文化理解、海外活動促進のための学部共通科目として「環境保全活動実験」、地理学科科目として「海外調査法およびフィールドワーク」を2008年度から実施してきた。過去の参加者数をみると、「環境保全活動実験」では2011年度の14名（中華人民共和国国内モンゴル自治区）、「海外調査法およびフィールドワーク」では2013年度の26名（フィンランド共和国）が最多であった（立正大学地球環境科学部，2018）。2024年度の「環境保全活動実験」はベトナム社会主義共和国で、「海外調査法およびフィールドワーク」はウズベキスタン共和国で実施し、参加者はともに7名であった。いずれの授業も選択科目であり、希望する学生が事前課題の提出などを経て参加可能となる。参加した学生の満足度は高い一方で、昨今の円安の影響などもあり、これらの授業にエントリーする学生数そのものの不足が課題となっている。

2-2. 教員・職員の専門性の活用

通常、多くの大学の授業は机上、もしくは実験室内で展開するものであるが、本学部においては実際に現場に赴き、周辺環境との相互作用の結果として生じる現象を理解させるフィールドワークを重視している。2-1で述べた本学部の2科目は計画立案に始まり、現地の情報収集、交通手段や宿泊施設に関する代理店との打ち合わせ、学生募集、事前指導、フィールドへの引率、事後指導、成果報告に至るまで、いずれも本学部の教員が2名以上で担当する。その過程においては、いうまでもなく教員が自らの専門性を活かした指導を行い、専門家としての見地に立脚した情報や知識の共有を行う。そのことを通じて学生は、単なる旅行では得難いような目の前で起きている現象の仕組みやその背景にある課題に関する理解を深めていく。また、そこで得られた知見や思考パターンを活用して、卒業研究に取り組むことが可能となる。

しかしながら、必修科目としてのフィールドワーク授業は設置されているものの、現行カリキュラムにおいて国外で実施するフィールドワークは選択科目となってお

り、履修することなく卒業していく学生が少なくない。その背景には、1) 自身の英語運用能力に対する不安、2) 外国に対する無関心と不安、3) 外国人とのコミュニケーションに対する必要性への疑問、がある。さらには経済的な負担を危惧する声も少なからずある。

これらの問題に関し本学部地理学科では、「学修の基礎I」において、1) に対しては「完璧な英語でなくても会話は成立すること」、2) に対しては「外国に行くことでわかる地球上の環境の多様性の体感」、3) に対しては「コミュニケーションを通じた多様な価値観を認識し、『自身にとっての常識』が『全ての人にとっての常識ではない』こと」の経験を通じて、立場の違いを超えた相互理解のための手段と有意性を考えさせることとした。異なる文化的背景を有する人々との交流を通じて得られる知見は、経験した者でないと実感しがたい部分はあるかもしれない。本授業では本学の日本語プログラム短期留学生および本学部・研究科在籍の留学生にも協力してもらい、それを教室内で小規模ながらも実践することとした。

実際の授業は、国際交流や海外経験、さらには政府主催の海外プログラムや大学内でのピアサポーター経験を有する国際交流センター職員の筆者（八木下）が担当した。そのなかで、自身の学生時代についても語りまた説明することで、学生が感じている不安などにも寄り添いつつ、それを乗り越えた経験から渡航すること、留学することの意義を説くこととした。さらにはその経験が社会人になってからも生かされ、英語を使った仕事に就くことが可能となった自身のキャリア形成と、それにより広がる自らの可能性や人生における選択肢の拡大を、自身の実体験を通じて伝えることとした。一方でもう一人の筆者（貝沼）は学生の反応、また実際のグループ作業がうまくいかないケースの観察から、学生にとっての狭隘と課題、それを解決するための方策、より効果的な国際理解教育のあり方について検討していくこととした。

2-3. 地理学科が抱える課題

2024年時点で大学1年生である学生は、中学生・高校生時代をコロナ禍という他者との接触が著しく制限された環境下で過ごしてきた。そのため、他者との関係性の拡大に多くの関心を持ちながらも、その構築に苦慮しているケースが少なくない。またSNS上での関係性は容易に作り上げることができるものの、現実社会でのコミュニティの拡大にはお互いの距離感を探りながら、慎重に進めていく様子も散見される²⁾。

以上の現状は、社会での即戦力にもつながる体験型フィールドワークを主要な調査手法とする、地理学科における学生指導の困難につながる。地理学科においては、1年次に日帰りの「地理基礎巡検」、2年次と3年次にそれぞれ4日間の「フィールドワークⅠ・Ⅱ（宿泊を伴うケースと伴わないケースがある）」を実施している。地理基礎巡検は任意参加（選択科目）であるものの、2年次と3年次のフィールドワークは必修科目である。しかしながら、近年では宿泊を伴うフィールドワークへの参加を困難とする学生の増加が顕著となっている。またインターネットを通じて海外の情報により容易にアクセスすることが可能になったこともあり、言語面や現地での行動において困難や危険を伴う海外に赴くことを躊躇する学生も多くなった。

しかし、地理学科のみならず、本学部においては豊富に自由に使える時間がある学生時代のうちに現地に身を置くことでしか得られない知見や経験を積むことを推奨している。そのためにも、多くの学生の渡航に対する躊躇に帰結する国際交流や異文化に対する苦手意識、外国語に対する障壁を乗り越えて、自らの世界や可能性を広げてほしいと考え、これまで教育プログラムを設計してきた。

以上のように、本学部では学生が海外で学ぶ機会をカリキュラム上（環境保全活動実験、海外調査法およびフィールドワーク）でも準備し、留学生も参加する「実践英語Ⅰ～Ⅳ」の授業を提供してきた。それらの科目は、時間割編成においても学生が履修しやすいように専門科目と重複しないような時間帯に配置するなど、学生がより身近に外国に触れられる機会を設けるようにしてきた。しかしながら、選択科目ではあるものの履修者の減少が著しく、その一方で2016年度に実施した卒業生対象アン

ケートによる自己評価から「外国語運用能力」、「国際的視野」などのスコアがやや低く、グローバル教育に課題があることが把握されてきた（立正大学自己点検・評価委員会 立正大学大学院自己点検・評価委員会、2017）。これらの課題を踏まえ、まずは留学生との交流から外国人とのコミュニケーションを身近なものとして感じ、次のステップとして自ら海外に赴きフィールドを開拓するような仕組み作りも目的の一つとして、地理学科では2020年度以降、国際交流センターに協力を仰ぎ、「学修の基礎Ⅰ」のなかで大学としての国際交流プログラムを紹介するための資料提供の依頼を開始した。また、2022年度には国際交流センターの職員による授業内におけるプログラムの紹介や質問の受け付け、2023年度からは留学生にも参加してもらい、日本人学生とのグループワークを通じた交流企画を実施することになった。

2-4. 国際共修とは

末松ら（2019）によると、国際共修は「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験」と定義される。末松（2023）は、国際共修のポイ

表1 国際共修のポイント

1	文化背景の異なる学習者を対象とした正課内外活動
2	「学び合い」を効果的に取り入れた教育実践
3	アクティブラーニングを活用した構築型の学習
4	学習者中心の授業設計
5	ティーチャーではなくファシリテーターによる教育介入

出典：末松（2023）をもとに筆者作成

表2 日本国内で実践されている「国際共修」の分類

授業の目的	概要	指導言語
多文化理解	異なる文化背景を持つ学生同士が討論、グループワークを通して相互理解を促進する。	日本語 英語
日本文化学習	日本の伝統文化、現代社会、企業文化など、留学生にとっては異文化、日本人学生にとっては自文化への理解を深める。	日本語 英語
テーマ別学習	国際時事、人権教育、コミュニケーション、クリティカルシンキングなどのテーマを基軸としたグループ討論、プロジェクトを行う。	日本語 英語
地域・産業界との連携	地域社会への貢献、地元企業との協働を授業に取り入れ、知識の享受者から情報発信や提案の出来るグローバルシティズンとしての視座を養う。	日本語
協働プロジェクト型	成果を意識した異文化間協働プロジェクトを実施する中で言語・文化背景の異なる学生同士が切磋琢磨し相互理解を図る。	日本語 英語

出典：末松（2014）をもとに筆者作成

ントを表1のようにまとめている。

また、末松ら（2019）は、「国際共修は、学習者の異文化理解の深化やコミュニケーション力の向上（中野、2006）、視野の拡大、自己成長、多様性の尊重、協働性（加賀美、1999; 2006）、自文化理解の促進（末松・阿、2008）など、学習者に有益であることが、これまで数多くの国内外の研究や教育実践報告から明らかになっている」とその意義を述べている。冒頭で様々な大学で国際化の取り組みがなされていることに触れたが、国際共修も多様な目的に分類することができる。末松（2014）は、表2のように国際共修を分類している。本表に基づくのであれば、本稿において取り上げる「学修の基礎Ⅰ」の取り組みは、国内学生にとっては「多文化理解」、留学

生にとっては「日本文化学習」に該当するといえよう。

3. 「学修の基礎Ⅰ」における国際共修について

国際交流センターでは、地理学科からの授業実施の依頼を受け、図1に示した流れで準備や事後処理を行った。

3-1. 授業概要

「学修の基礎Ⅰ」は全15回実施され、本学の建学の精神やカリキュラムポリシーを正しく理解することを目的とした全学共通科目である。内容は学科担当の教員に委ねられており、地理学科では学生のアイデンティティー醸成を目的に、大学の単位制やGrade Point Average

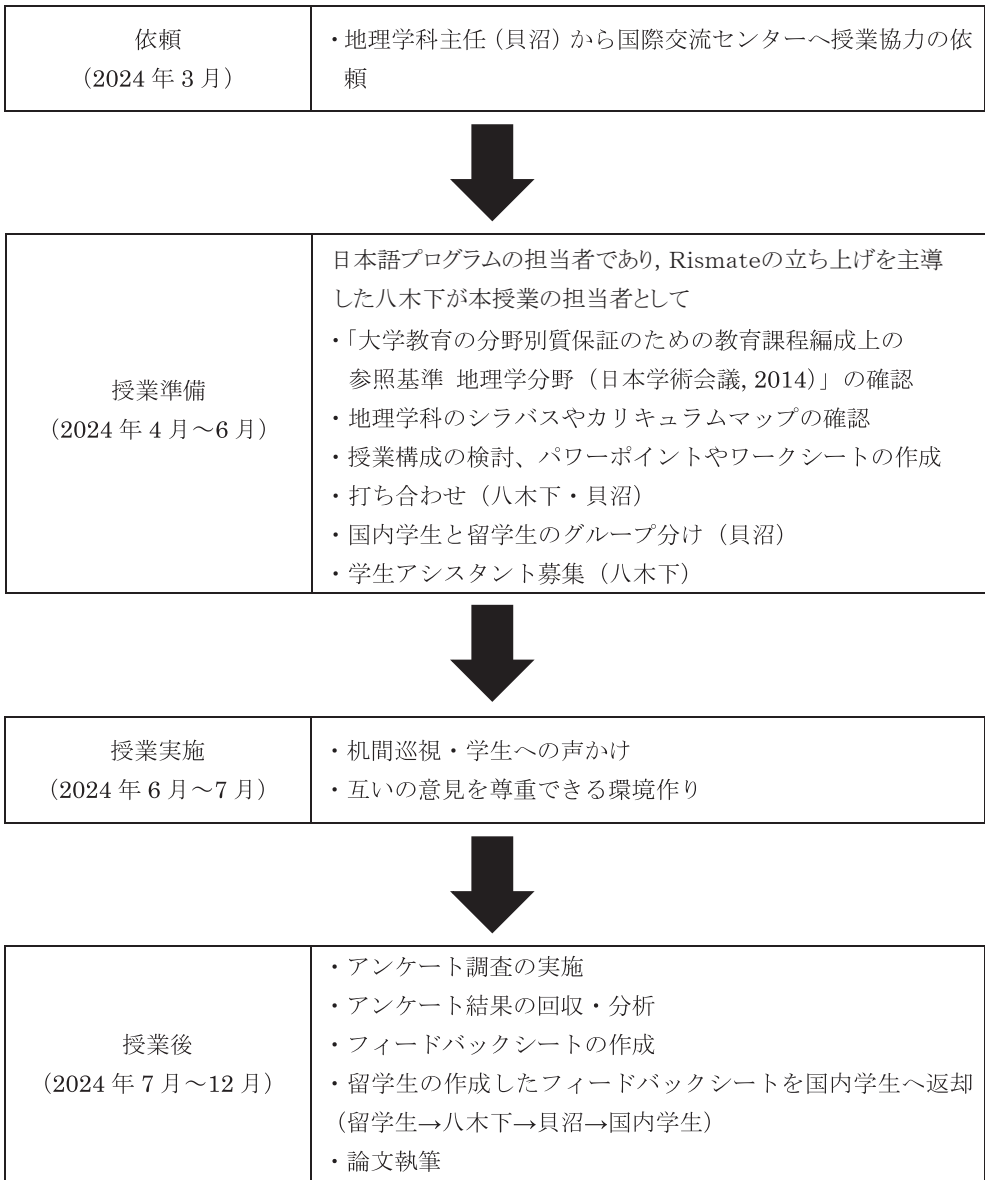


図1 授業実施依頼から授業後までのフロー

出典：実際のフローに基づき筆者作成

(GPA) の考え方からはじまり、建学の精神や教員・OB対談を通じたキャリア形成のあり方、「グローバル社会の中で生きる」等をテーマにした授業で構成され、同学年の学生が一堂に会して受講する4年間を通じて唯一の授業でもある。

本稿では、2024年度第1期に実施した学修の基礎Ⅰの中から、第8回(2024年6月4日)、第12回(同7月2日)に留学生を交えて実施した国際共修について取り上げる。

3-2. 授業のテーマと指導目標

授業のテーマは、「グローバル社会の中で生きる ～立正大学で地理学を学ぶ学生に知ってほしいこと～」である。各回の内容について、第8回は留学生とのディスカッション等を、第12回は学生発表・学内の国際交流制度の紹介等を行った。また本授業の指導目標は、以下のとおりである。

- a. 日常生活から地理学を学ぶことまで、私たちは様々な点で世界と結びついていることを理解できる。
- b. 国内外で発生する事象について、地理学の観点からどのような課題や理由があるのかを説明できる。
- c. 留学生とのグループディスカッションをとおして、国際交流や世界の文化への関心・意欲の高揚および学習意欲の向上を図る。
- d. 学内の多様な国際交流・留学制度について理解し、地理学を学ぶ学生・グローバル社会の一員として、何ができるのか、今後どのようにかわっていきたいかについて、当事者意識を持って考えることができる。

3-3. 授業の様子と配慮事項

授業の実施においては、特に以下の2点に配慮した。

(1) 明確な指示

授業実施においては、パワーポイントやワークシート等の補助教材を使用し、明確な指示出しを心がけた。教室には、国内学生、留学生、学生アシスタント、オブザーバーを含めると100名以上の参加者がいたが、イラストも投影することで指示が的確に伝わるようにした。国内学生・留学生への個別フォローは、学生アシスタントやオブザーバーの教職員が行った。進行役、フォロー役等の役割分担を行うことで、授業を円滑に進めることにつながった。

(2) 学生の自発的な発言の促進

授業の中で、学生が自由な発言をできる環境を整えることを特に重視した。そのため、授業の冒頭で以下の3点をルールとして設定した。

- a. グループメンバーの意見を最後までよく聞き、尊重し、否定はしない。
- b. メンバーが話し終わったら、全員で「拍手」をして、「イイネ!」と言いつつ。
- c. グループワークで知り得た個人情報、口外しない。

今回の授業ではテーマの1つに「多文化共生」を掲げており、学生同士の多様な考えに触れさせるために、否定的な発言を控え、互いの考えを尊重できるようにした。「拍手&イイネ!」は、筆者が受講した職員研修の講師のスタイルを参考にしたものだが、学生も自己肯定感が上がり、楽しい雰囲気が出ていた。授業の中での呼び名を学生自身が自由に決められるようにしたことも、会話のきっかけにつながった。

3-4. 授業実施における留意事項

授業の進行者の留意事項としては、筆者の経験をもとに以下の2点が指摘できる。

第1に、時間配分が挙げられる。今回の指導案では活動内容が多めだったため、1回目の授業で目標まで終了することができなかった。授業時間は限られており、突発的な対応事案が発生する可能性があるため、余裕を持った授業構成が求められる。

第2に、環境整備である。教室では100名近くが複数のグループに分かれて同時にディスカッションをするため、声が聞き取りづらい環境にあった。また、留学生の人数から1グループの人数が8~10名程度と多くなった点についても、可能な限りの改善が求められる。

教室や人数等制限もあるが、学生が活動しやすい環境を用意することが必要であると実際の授業実践からも考えられた。

4. 国内学生のアンケート調査結果

4-1. アンケート調査の概要

本授業を通じて、国内学生に生じた国際交流に対する興味・関心の変化を明らかにすることを目的として、アンケート調査を実施した。調査は、Microsoft 365のFormsを用いて実施し、回答期間は授業当日の2024年7月2日から7月12日の10日間とした。アンケート調査の対象者は、立正大学地球環境科学部地理学科1年生85

名である。有効回答件数は62名分であり、回答率は72.9%である。対象者と回答件数は、以下の表3に示したとおりである。

表3 アンケートの対象者と回答件数

回答	人数・比率	備考
対象者	85名	地球環境科学部地理学科1年生
回答件数	64名	
有効回答件数	62名	重複回答2名分は削除
回答率	72.9%	調査実施期間：2024年7月2日～7月12日

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

4-1-2. アンケート調査の結果

アンケート調査の内容と回答は以下の通りである。

Q1：6月4日（火）、7月2日（火）の授業を受ける以前において、国際交流や留学等に対して、どの

ようなイメージを持っていましたか（自由記述・延べ人数）。

Q2：留学生と一緒に授業へ参加して、国際交流や留学について、今まで持っていた海外・留学生に対するイメージが変わったり、新たな発見があったりしましたか。

Q3：Q2のように、回答した理由を教えてください（自由記述・延べ人数）。

Q4：6月4日（火）、7月2日（火）の「グローバル社会の中で生きる」は、理解しやすかったですか。

Q5：6月4日（火）、7月2日（火）の「グローバル社会の中で生きる」で、学んだこと、発表したこと、留学生と交流した経験は、大学生活に役立つと思いますか。

Q6：授業（留学生との交流・発表）を終えて、グローバル社会の一員として、これからどんなことに挑戦してみたいと思いましたか。すぐにできることを1つ記入してください（自由記述・延べ人数）。

表4 Q1の回答

順位	回答	人数
1	ハードルが高い、遠い存在、興味がない	37
2	言語能力（英語が苦手）	18
3	費用面（お金がかかる）	6
その他	良いイメージ（留学したい、良い経験になる）	5
	身近なこと（親戚が海外にいる、留学経験がある）	2
	勉強のために他国へ来た留学生は真面目で頭の良い人	1
	犯罪や不衛生な環境	1
	形式的なものが多い	1
	留学生は内向的であり発言しない印象	1
	異文化を本場の地で学ぶことが留学	1
	留学生は今までのクラスにいるような感じの普通の子	1

出典：八木下（2023）を参考に筆者が自由記述を分類して作成

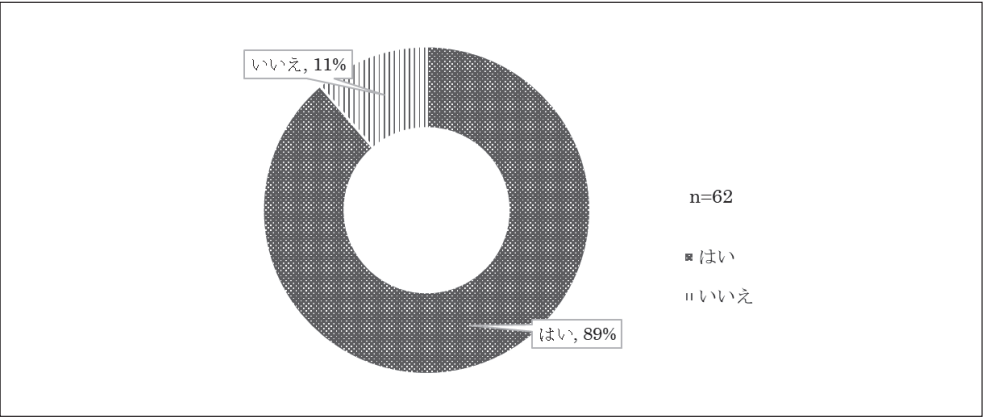


図2 Q2の回答者数の内訳

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

表5 Q3の回答

	順位	項目	回答例（まとめ）	人数
はいの回答者	1	親近感	国際交流を身近に感じた	23
			(今までは固定概念のようなものを持っていたが)留学生へのイメージがポジティブなものに変わった	
			ハードルが下がった	
			視野の拡大	
			先輩の話が聞けた	
	2	異文化体験・異文化理解	他国の文化について理解を深める	19
			留学生への理解	
	3	言語	日本語で会話ができた	17
			コミュニケーション・意思疎通がとれた	
	4	学内制度の理解	大学の国際交流制度についての理解（海外派遣プログラム奨学金など）	7
留学へのチャレンジマインドの醸成				
5	その他（学生の回答を引用）	授業で接した留学生の方はおとなしい控えめな方で少ししか会話はできませんでした。様々なことに興味を寄せている様子が見て取れたので、もっと話す時間があればとの思いを強く持ちました。	2	
		留学生の方々が日本語で話してくれたのでストレスがなかったが、海外に行ったら日本語を話せる人は少数だと思うので何とも言えない気持ちになりました。		
いいえの回答者	「いいえ」の回答理由（学生の回答を引用）		備考	人数
	今までの良いイメージだったので新たに加わることはありませんでした。		前向きな評価	1
	中高で聞いた話や、大学のパンフレットで聞いた話がほとんど合っていたから。		前向きな評価	1
	とても良い意味でイメージ通りだったから。改めて、異国に学びに行く留学生に対して感銘を受けた。		前向きな評価	1
	自分はあくまで日本で勉強したいことやどうしても学びたいこと、やりたいことがあってきている認識ではいたので、それに置いては変わらなかったため。			1
	留学生は日本について多く知っており、また日本語に関しても上手くしゃべっていたため。			1
	体調不良で欠席したため。			1
	特別な感じはなかった。クラスにいたような感じ。			1

出典：筆者が自由記述を分類して作成

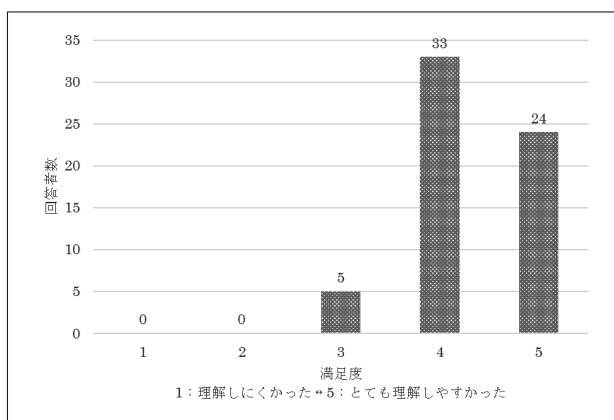


図3 Q4の回答者数の内訳

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

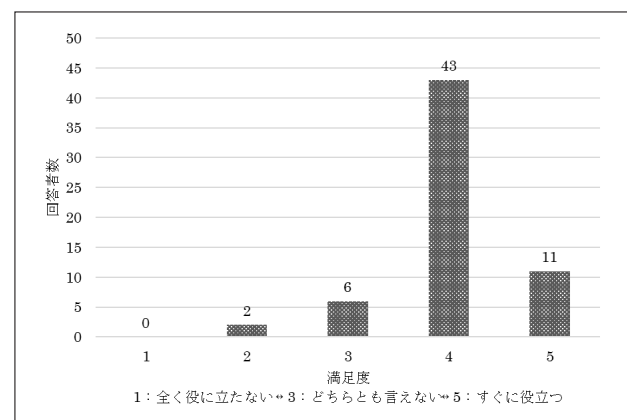


図4 Q5の回答者数の内訳

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

表6 Q5の回答

順位	項目	回答例（まとめ）	人数
1	言語習得	外国語学習・TOEIC受験	17
2	国際交流	外国人（留学生含む）との会話 学内のイベントへの参加	15
3	日本・世界への理解	国内外の文化・生活・歴史の理解 海外の出来事を調べる 海外から見た日本へのイメージ調査（1名）	13
4	海外渡航	大学の海外派遣プログラムへの参加、旅行	6
5	メディア媒体	海外のニュースを調べる	2
6	その他	街で困っている人への声がけ ボランティア 留学経験のある人に話を聞く	7

出典：八木下（2023）を参考に筆者が自由記述を分類して作成

4-2. アンケート結果に基づく授業をとおしての変化

以下に国内学生を対象とした授業後アンケートのQ1からQ3の結果をもとに、学生自身が感じた変化を整理する。

Q1（授業参加以前の国際交流や留学に対するイメージ）に対する回答によれば、授業前の段階では、国際交流や留学等は、難易度の高さ、興味・関心の欠如、言語能力に課題を感じる学生が多い傾向にあった。「ハードルが高い、遠い存在、興味がない」という否定的な意見は、最も多い37名で回答者の半数以上を占めた。続いて言語能力が18名、費用面が6名という結果であった。大学に入学して間もない学生は、海外留学はあまり身近ではなく難しいという印象を持っていたことが読み取れる。言語能力においては、国際交流には英語が必要という固定概念を持つ学生が多く、留学生と日本語を用いて交流するという発想がなかったことが推測できる。また、費用面では、昨今の物価高や円安の影響で、学生に「あえて海外に行かなくてもよい」という考えを助長していることが推測される。

Q2は、留学生とともに授業を受けたことによる海外・留学生に対するイメージの変化や新たな発見の有無に対する問いであった。約9割の学生が「はい（あった）」と回答した。「はい」と回答した学生の理由を表5のとおり「親近感」「異文化体験・異文化理解」「言語」「学内制度の理解」の4つのカテゴリとその他に分類した。回答理由は自由記述としたため、筆者が独自にカテゴリ化を行い分析した。

カテゴリ化においては、学生の自由記述内の全ての

コメントを、八木下（2023）を参照しながら、入力内容に基づいて共通点を見出しグループ化した。また、分類に際しては、学生がどのような点に興味・関心を持ちコメントを書いているのかに着目した。複数のカテゴリに該当するコメントの内容は、重複カウントとした。分類作業は、個人的な解釈に基づいているが、可能な限り客観的に分析するように心がけた。

調査結果の分析をとおして分かった国際教育交流活動の意義やメリットを以下のようにまとめる。アンケート結果の詳細は、表5を参照されたい。

（1）親近感を感じることに

Q2およびQ3（授業後の自身の変化）について、本調査で最も回答が多かった意見は、「国際交流を身近に感じた」であった。授業では、留学生とのグループワークやRismateのサポーターを務める上級学生が参加し、国際交流に関する体験談の紹介を行った。同じ学生という立場の留学生や上級学生の経験を共有し、視野を広げることにつながった。

また、授業の導入部分では、「世界と結びついていると感じるのは、どのような時ですか。」と主題に関する問題提示を行い、ペアでスモールトークを行った。スモールトークを実施する前には、学生が身近なことから事例を見つけ出せるように、「スーパーに行ったら、ニュージーランド産のキウイフルーツが売っていた」などを事例に挙げた。

授業後の学生アンケートには、「親近感」について以下の記載があった。アンケートの一部を抜粋し、紹介する。

表7 授業後アンケートにおける「親近感」に関する記載

1	今回の授業に参加して思っていたよりも海外について自分にも関係していることが多かった。また海外の人たちと会話したり先輩方や先生方の話を聞いて国際交流や留学が身近になった気がした。
2	留学は難しくてもYさんのように学校で国際交流ができるかたちもあると知って、興味がわきました。
3	今までは日本国内のことしか知らなかったが、すぐ隣の国であっても日本の常識と違うところがあったり、初めて知る文化もあったりして興味深かった。また、今までよりも海外を身近に感じるようになった。
4	先輩の体験談で言語を現地で体験して学びたいという理由で留学したということを聞いてイメージが変わった。
5	国籍の異なる留学生と関わることはとても楽しく、今までしたことのない貴重な経験ができた。

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

国際教育交流担当職員が学生の対応をする中では、「国際交流はハードルが高い」という意見が頻繁に聴取される。また、授業後アンケートの結果によると、「国際交流＝英語力が必要」の固定概念を持っている学生が一定数いるようにも読み取れる。確かに、語学力が求められる研修・留学制度はある。しかしながら、本学には国内やキャンパスにしながら、国際交流に参画できる活動やイベントも存在する。学生がこれらの活動に積極的に参加するようになるためには、教職員が様々な方法で継続的に情報を発信し、上級学生の体験談などを聞く機会を恒常的に提供することが重要である。

(2) 異文化体験・異文化理解の促進

2番目に多かった回答は、「異文化体験・異文化理解」であった（授業後アンケートの結果による）。本授業は1年生向けの科目であり、これまであまり関わる機会がなかった留学生との交流をとおして、「留学生」という存在を認識し理解できるようになったものと考えられる。また、国際教育交流担当の職員による実践形式の授業をとおして、キャンパス内での国際交流や日常生活でも海外と関係していることを実感できたのであろう。

コロナ禍では困難だった対面での国際交流ができるようになった現在において、実践形式で国際交流を体験することは、学生の異文化理解力向上につながる。また、教職員が連携して国内学生に異文化への理解を促進すること、留学生にはコミュニティへの参加を促進することは、キャンパスの国際化にもつながる。

表8に、授業後の学生アンケートにおける「異文化体験・異文化理解」に関する記載の一部を抜粋し、紹

表8 授業後アンケートにおける「異文化体験・異文化理解」に関する記載

1	外国から見て、日本で起きたカルチャーショックの話を聞いて、これは日本では普通だと思っていたのに！という事がたくさんあって驚きました。
2	留学生の方たちも自分たちの言うことを理解しようとするのが楽しそうに見えた。国際交流は未知との遭遇ができる場なんだなと思った。
3	国籍の異なる留学生と関わることはとても楽しく、今までしたことのない貴重な経験ができた。
4	話を聞くと生活様式の違いを楽しもうとする姿勢がありそれを持つことが重要であると思った。
5	留学生と話していくうちに、自分は留学生に勝手なイメージ（何を言っているのか分からない、日本の文化が分からないなど）を持っていたなと感じた。

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

介する。

(3) 言語使用における自信の向上

3番目に多かった回答は、「言語」である（授業後アンケートの結果による）。回答が多かった理由として、留学生とコミュニケーションがとれたことが、学生の自信につながったと考えられる。確かに、「国際交流」と聞くと、「外国語」、「渡航」、「外国人」、などの要素を想定する学生は多い。しかし、グループワークをとおして、留学生と日本語を使用して会話ができること、プレゼンテーションの内容を理解してもらえた喜びを実感したことが、自信を向上させたと考えられる。

今後の初年次導入科目においては、学生が新しい挑戦ができるよう、教職員が環境を整えることも一層求められるであろう。

表9は、授業後の学生アンケートにおける「言語」に関する記載の一部抜粋である。

表9 授業後アンケートにおける「言語」に関する記載

1	留学生さんが流暢に日本語を話しており、非常に親しみやすかった。
2	今回参加して下さった留学生の方々とは皆日本語でコミュニケーションをすることが本当に上手で、りすめいと（原文ママ）のような国内での国際交流であれば比較的気軽にできるかもしれないと感じた。
3	留学生は母国語しか喋ることができないのかと思っていたけれど、実際に話してみると意外と日本語を喋り聞き取れる人が多かった。
4	日本語が通じなくても英語が世界共通語でもあるので英語を使えば楽しく交流できることを知った。
5	自分は今まであまり留学生などの海外の人と関わる機会がなかったので、しっかりと楽しめるか、コミュニケーションをとれるか心配だったが話してみると、怖がる必要がないことが分かった。

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

4-3. アンケート結果に基づく学生の理解度と授業の効果

授業後アンケートのQ4からQ6（授業の理解、有効性、今後挑戦してみたいこと）の結果をもとに、学生の理解度と授業の効果を以下のように分析する。

(1) 学生の理解度

Q4では、9割以上の学生が、「4（理解しやすかった）または5（とても理解しやすかった）」を選択した。具体的に見ると、4が33名と最も多く、続いて5が24名、3（どちらとも言えない）が5名と続いた。筆者が考えた授業の目標や目的がほとんどの学生に理解されたことが明らかとなった。学生アシスタントの導入も、学生の

理解を促進する手助けとなった。

(2) 授業の効果

Q 5では、約9割の学生が、「4（今後役立つ）または5（すぐに役立つ）」を選択した。具体的には、4が最も多い43名で、続いて5が11名、3（どちらとも言えない）が6名、2（あまり役に立たない）が2名の順となった。多くの学生にとって授業での学びや発表、留学生との交流の経験は有益なものになった。筆者や上級学生の実体験に基づく説明を聞き、留学生と実際に交流し日本語で対話することは、講義形式の授業では味わえない貴重な経験となった。今後は、少数派の意見も参考に、さらなる内容の改善・充実化を図ることが課題である。

(3) チャレンジマインドの醸成

Q 6では、学生から様々な意見が出たが、実際に成果として残るものを選ぶ傾向がみられた。具体的には、言語習得（外国語学習やTOEIC受験等）が17名と最も多く、国際交流（外国人との会話や学内のイベント参加）が15名、日本・世界への理解（国内外の文化・生活・歴史等）が13名と続いた。国際交流には様々なスタイルが存在するが、個人で挑戦したい学生は言語習得や日本・世界への理解を選択していた。一方で、他者と協力しながら挑戦したい学生は、実践形式を中心とする国際交流を好む傾向にあった。

4-4. 国際教育交流担当職員から見た学生の成長

授業の企画・運営を担当した国際教育交流担当職員の視点からは、学生が成長した点について、以下のように整理することができる。

(1) 専攻分野の知識活用

本授業では、国内学生の専攻分野や興味・関心に基づき、「留学生向け国内旅行ツアーの提案」と題し、留学生への企画プレゼンテーションをする内容を設けた。プレゼンテーションの準備段階より学生はこれまでに身につけた地理学の知識を活用させ、それらを応用させる機会を提供できたと考えられる。

国内学生は、6月の授業で学んだ内容を約1カ月程度におよぶ授業外での準備期間を経て、7月の授業でグループプレゼンテーションを行った。準備期間中は、普段は異なる必修クラスに所属している学生同士も授業外でコミュニケーションをとり、必要に応じて同グループの留学生にもヒアリングを行うよう指示した。これらの活動をとおして、国内学生は自身の持つ知識を活用し、他者に分かりやすく伝えるスキルを身につけることができたと考えられる。

(2) 新しい価値や視野の拡大

国際教育交流活動は、国内学生が自ら持つ概念を変えるきっかけとなった。授業に参加した多くの国内学生は、「留学生＝英語」のような固定概念を持っていたように思えた。実践形式で留学生と交流することで、留学生が日本語を話せることや日本について様々な知識を持っていることを知り、学生自身がイメージしていた留学生像にとらわれないタイプの留学生の存在に気付くことができたと考えられる。

(3) ロールモデルの存在

1年生にとって、大学生活を送るうえでのロールモデルの存在は必要不可欠である。学生は、自身の身近にいる上級学生の一言に大きな影響を受けているようなケースを、筆者らはこれまでも多数観察してきた。今回の国際教育交流活動では、地理学科や社会福祉学科に所属する上級学生がアシスタントとして参加し、授業中のサポートに加えて、留学生の生活支援をするRismateの活動や韓国での海外研修の体験を紹介した。

コロナ禍は、学生同士のコミュニティの希薄化を加速させた。また、アルバイトや長距離通学等による忙しさなどから、学生は課外活動をはじめとした学内コミュニティへの加入にも消極的である。そのため課外活動に参加することで得られる上級学生との交流機会が、著しく限定される結果にもなりかねない。

国内学生は、授業の中でロールモデルとなる身近な上級学生からの話を聞くことで、国際交流について具体的にイメージをしやすくなった。アンケート結果からも、「先輩のように、学内でできる留学生のサポーター活動に参加してみたい」等の意見がみられた。

本学にはStudent Assistant (SA) 制度やTeaching Assistant (TA) 制度など、授業運営の補助を目的とした制度が用意されている。今後は、ピア・サポート制度を充実させ、各学部・各部署で実施されている人材育成の制度を学内で集約することで情報が学生へ効率的に提供され、学生が興味・関心に合わせて積極的にそれらの制度を利用できるようにすることが求められる。

(4) 新たな人間関係の構築

本授業は、入学後2カ月から3カ月が経過した時点で実施した。ちょうど友人関係や必修クラス内での人間関係が安定してくる時期である反面、新たな交友関係を築くきっかけが掴みにくい時期でもある。地理学科の1年次必修クラス数は4であり、このクラス分けは「情報処理の基礎（第1期開講）」「基礎地図学および実習Ⅰ・Ⅱ（第1期および第2期開講）」「基礎英語Ⅰ・Ⅱ（週2回、

第1期および第2期開講)」「学修の基礎Ⅱ(第2期開講)」に適用される。すなわち、同クラスのメンバーとは各期週4回の授業をともに受講する反面、他クラスのメンバーとともに受講する授業は教養的科目、専門科目以外ではなく、またそれらの多くは講義形式であり、学生同士が協働する機会は限定的である。その結果、同級生でありながら、お互いの存在をほぼ知ることなく卒業していくようなケースもこれまで一定数みられた。また、2年次の地理学基礎セミナーで同じクラスになっても会話の糸口が見つからず、新しい交友関係が広がりにくい、という悩みを持つ学生も一定数いた。しかしながら、2023年度の「学修の基礎Ⅰ」で同様の授業を実施した結果、現在の2年生からは、1年次のクラス横断型のグループワークの経験があったため、2年次の地理学基礎セミナーやフィールドワークⅠの授業で新たに交流することになったメンバーとも話のきっかけを見つけやすく、それを核にして新しいネットワークの構築と拡大にもつながったという意見も聞かれた。7月2日の授業実施後に、2回のグループワークを通じて感じたことをアンケート調査から得た回答より表10にて紹介する。

表10 授業後アンケートにおける「同級生との関係性の構築」に関する記載

1	今まで知らなかった人と準備段階から様々な場面で交流することができました。同じ学科でありながらも今まで話す機会がなかった人が多かったので、これを機にこれからも交流を続けていけたらと思います。(以下略)
2	地理学科のほかのクラスとの縦の交流(原文ママ)も少ない中でこういった活動をするのはハードルが高いのではとも思ったが、今回の交流を通して80数名しかいないとはいえ誰かもわからないような人も多かった地理学科のほかのクラスの人と顔見知り程度にはなれたり、4年間のことを考えれば実りのある2回だったと思う。
3	地理学科内でも普段の授業では、クラスごとなのでほかのクラスと関わるのが少なかった中、地理学科全体をごちゃごちゃに混ぜてグループワークすることによって新しく話せた人も増え、良いグループワークをすることが出来た。(中略)また、普段の授業では先生からの話を聞く形だが、グループワークで意見を聞いたり、話したりと普段できない授業をすることが出来ていい経験だった。

出典：アンケート結果をもとに筆者作成

他方、アンケート結果から、「今回行ったプレゼンテーションは、ほぼ即席のチームで構成されていて、クラスもまばらで、プレゼン内容も即席や、一人任せも多いと感じました。また、やはりクラスを隔てる壁ができ

ており、全く話さないところもあったと感じました。」と、グループ内の連携不足を指摘する意見もみられた。今回は1グループの人数が10名程度となり、学生間の意識共有や課題に対する温度差のあるグループもあった。学生間の交流の促進という本授業のもう一つの狙いを考えるのであれば、今後はグループの規模や、すべての学生が作業にかかわることでコミュニケーションを深められるような仕組み作りを検討する必要がある。

5. おわりに

本稿では、多文化共生社会を生き抜く人材育成について、本学地理学科1年生と日本語プログラム短期留学生および本学部・研究科の留学生の国際共修を事例に考察した。教員と職員それぞれの専門性を融合させることで、(1) 学科の全1年生と留学生による異文化理解を深めるためのディスカッションを実施した点、(2) 1つのプロジェクトを通じて実践的なスキルを養う活動を行った点において、前例のない授業の実践を試みたといえる。さらに、これまで海外にあまり興味・関心を抱いていなかった学生も、本授業をとおして国際交流や海外に視点を向け、異文化体験・異文化理解への関心の創出および増大につながられた点は、特筆すべきであると考えられる。

今回は国内旅行をグループワークのテーマとしたが、学科の学びや学生の興味・関心に合わせて、今後は環境問題や地域理解など多様なテーマを取り入れていきたい。また授業だけに留まらず、試行錯誤を繰り返しつつも正課外活動やフィールドワークなどの新たなアプローチを絶えず追求していくことが望ましく、そのための仕組みづくりが求められる。

最後に、参考資料として、2024年6月4日の授業で配付した資料を添付する。学生はこの資料をもとにグループワークを進め、7月2日のプレゼンテーションに備えた。本ワークシートは、筆者(八木下)がこれまでの経験を活かし、学生がディスカッションや作業に取り組みやすいよう設計したオリジナル資料である。具体的には、ディスカッションをする前に学生自身の意見や、グループメンバーの名前を記入できるスペースを設け、また授業内でインタビューした内容は、プレゼンテーションの構成に活用できるようにした。授業の目標を記載し、学生はまず作業フローの全体像を把握したうえでTaskごとに段階的に進めていくので、作業のペース配分も自主的に考えることができるのみならず、迅速な意識の共有を可能にしたと考えられる。

教員と職員は大学という組織内の役割の違いに基づき、授業の構築、職員による特別授業実施、学生の国際交流
学生に対して異なる視点を有することがある。教員と職員への意識向上、さらには学科のカリキュラムの検討に際
員の各々の視点から得られた情報共有および連携によるし、本稿にて紹介した取り組みが参考になれば幸いである。

学修の基礎Ⅰ（地球環境科学部 地理学科）
2024年6月4日（火）第8回：グローバル社会の中で生きる

ワークシート A

グループ： _____ 学籍番号： _____ 氏名： _____

今日の目標：

- ・日常生活から地理学を学ぶことまで、私たちは様々な点で世界と結びついていることを理解できる。
- ・国内外で発生する事象について、地理学の観点からどのような課題や理由があるのかを説明できる。
- ・留学生とのグループディスカッションをとおして、国際交流や世界の文化への関心・意欲の高揚および学習意欲の向上を図る。
- ・学内の多様な国際交流・留学制度について理解し、地理学を学ぶ学生・グローバル社会の一員として、何ができるのか、今後どのようにかかわっていきたいかについて、当事者意識を持って考えることができる。

Task1：はじめに

皆さんが、普段の生活の中で、世界と結びついていると感じるのは、どのような時ですか。

Task2：グループメンバーの確認

番号	呼び名	メモ欄	番号	呼び名	メモ欄
1			7		
2			8		
3			9		
4			10		
5			11		
6			12		

Task3：留学生へのインタビュー

- A：日本に留学を決めた理由は何ですか？ B：日本に来て良かったことは何ですか？
C：日本に来て困ったことや驚いたことは何ですか？ D：熊谷の印象は何ですか？
E：その他（フリートーク可）

Task4 : ペアワーク

留学生の体験談を聞いて、皆さんが同じ場面に遭遇したら、どうするかを考えてみましょう。

Q : もし海外で 1 人の時に、困ったことやトラブルがあった時、どこに行って、誰に相談しますか。
その理由は何ですか。※大学関係者（教職員）がいない状況を想定して、考えてみましょう。

Task5 : アクティビティ～あなたは Rissho Travel Agency の新人ツアープランナー～

あなたは Rissho Travel Agency の新人ツアープランナー。来店したお客様は、日本国内の日帰り旅行を考えている外国人留学生です。以下の条件・状況をクリアする最適なプランを提案してください。

1 : 日本国内の日帰り旅行

2 : お客様は外国人留学生で、埼玉県に住んでいる

※金額の条件は設けません。自由な発想で考えてみましょう！

※ポイントは、留学生の情報や希望をたくさん聞き出せることです！



・お客様の氏名 : _____

・希望や好きなこと :

Task6 : 企画・提案・発表準備～お客様が喜ぶ提案ができるように、プランニングから始めよう～



写真1 本授業の参加者（2024年7月2日）



写真2 国内学生による留学生向け国内旅行（グループ作業の成果）のプレゼンテーション発表（2024年7月2日）



写真3 発表を聞いた参加者によるフィードバックの実施（2024年7月2日）

謝辞

本稿の作成にあたり、デンドウゲーリー国際交流センター長をはじめ、河井宏幸熊谷国際交流課長、佐藤ゆう子品川国際交流課長、国際交流センター職員の皆様には、業務上のご理解とご配慮をいただき、温かい励ましのお言葉を頂戴いたしました。また、Rismateのサポーターの皆さんには、円滑な授業の進行のためにご協力をいただきました。さらに、地球環境科学部地理学科の1年生必修科目担当の先生方には、グループ分けに際しての助言をいただきました。特に須崎成二先生には、地理学科1年生のみならず留学生とも絶えずコミュニケーションを取り、双方の橋渡し役も担っていただきました。地理学科広報担当チームの皆様にも、記録係として活躍していただきました。ここに記して御礼申し上げます。

注釈

- 1) ピア・サポートとは仲間や同輩が相互に支え合い課題解決する活動を意味する（日本ピア・サポート学会：<http://www.peer-s.jp/idea.html>，最終閲覧日 2025年1月29日）
- 2) コロナ禍以前にもそのような学生はみられたが、近年入学した学生にはそのような傾向の増加が見受けられる。筆者らの学生時代には、学生の時分は失敗を恐れず興味があることはまず挑戦すべしという風潮が強かったが、近年の学生は注意深く、また一方で他者とのかわりに一定の距離を保ったり、一緒に空間にいても各自が自身の携帯電話に見入るようなケースが増えた。

文献

加賀美常美代 1999. 大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入。コ

ミュニティ心理学研究2:2:131-142.

加賀美常美代 2006. 教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるかーシミュレーション・ゲームと協働的活動の場合。異文化間教育24:76-91.

末松和子・阿 栄娜 2008. 異文化間協働プロジェクトにみられる教育効果。異文化間教育28:114-121.

末松和子 2014. キャンパスに共生社会を創るー留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けてー。日本学生支援機構・留学交流42:9:11-21. <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000039-I11010024>（最終閲覧日2025年2月20日）.

末松和子・秋庭裕子・米澤由香子 2019. 『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.

末松和子 2023. 『異文化の中に身を置く 留学のハードルを下げるためにできることー国際共修を事例としてー』一般社団法人日本私立大学連盟.

教育未来創造会議 2023. 「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ＜J-MIRAI＞」（第二次提言）概要. <https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/230427gaiyou.pdf>.（最終閲覧日2024年12月15日）.

中野はるみ 2006. 異文化教育における留学生の役割. 長崎国際大学論叢6:55-64.

八木下雄清 2023. 留学生と学ぶ『国際共修』の可能性ー自大学・地理学科における初年次教育の実践をととしてー. 千葉大学ALPS2022年度生プロジェクト研究・実習(2) 成果報告会（2023年12月16日 Zoomにて実施）.

立正大学自己点検・評価委員会 立正大学大学院自己点検・評価委員会 2017. 『平成28(2016)年度立正大学4年生満足度アンケート報告書』立正大学. https://www.ris.ac.jp/introduction/inspection_evaluation/rpkm0i0000000761-att/houkokusho_2016c.pdf（最終閲覧日:2025年2月22日）.

立正大学地球環境科学部編 2018. 『地球環境科学部20周年記念：10年の歩み 2008～2017』立正大学地球環境科学部.

Fostering Globally Minded Human Resources toward a Multicultural Coexistence Society Utilizing the Expertise of University Faculty and Administrative Staff

YAGISHITA Yusei*, KAINUMA Emi**

* Center for International Exchange, Rissho University

** Department of Geography, Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University

Abstract :

This study explores international educational exchange and students' growth in the development of globally minded human resources through the expertise of university faculty and administrative staff. In this research, we examine the growth of students through intercultural collaborative learning conducted from June to July 2024, focusing on the new challenges in "Introduction to Fundamentals of Academic Works I" in the Department of Geography, Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University.

Based on the results of a survey conducted after the class, the impacts of international co-curricular activities on students are analyzed, highlighting the importance of an international perspective, the use of faculty expertise, and the benefits of practical international exchange experiences. The survey results indicate that students' perceptions and attitudes toward international students have changed significantly, and their cultural understanding, confidence in their language skills, and sense of global interconnectedness have improved markedly. The findings suggest that collaborative efforts by faculty and administrative staff can effectively enhance students' global competencies and promote internationalization at home.

Key words : Intercultural collaborative learning, International students, Globally minded human resources, Internationalization of universities, Multicultural coexistence